教皇様の声

聖マリアの栄光

被昇天は罪にうち勝ったしるし

「ああ、神よ、あなたの王座は代々とこしえにあり、その王国のつえは正義のつえ。(…)王の娘は、黄金で織られた豪奢をきわめた服をつけ、王の前に導かれる。」(詩篇44(45)・7、14)

本日の典礼は、真に人間的なイメージを使うこの詩篇のことばで、信仰の偉大な秘義、いとも聖なる御母、処女聖マリアの被昇天の秘義を示しています。

しかし、聖母のお言葉は、詩篇44にみられる比喩よりもずっと深い意味を含んでいます。聖母マリアは、従姉のエリザベトの家の戸口で、「主の御母」と挨拶を受けたとき、マニフィカトをのべられました。

「わが霊魂は主を崇め奉り、わが精神はわが救い主なる天主によりて喜びに堪えず。(…)全能にまします御者、われに大事をなし給いたればなり。聖なるかな、そのみ名。」(ルカ1・46～47、49)

深遠な秘義

聖母がこの賛歌を口にした時には、すでに大天使のお告げの通り、聖母のうちにご託身の秘義が実現していました。神の御子、永遠のみことばは、聖霊の御力により、マリアの胎内で人間になっておられたのです。

「丘陵の地に」エリザベトを訪問した時、マリアはすでに神の御子の御母となり、人類史上最深の神秘をみずからのうちに秘めておられました。

この神秘の深奥より、マニフィカトの賛歌は、ほとばしりでます。「偉大なことをされた」(ルカ1・49)ゆえ、神の全能をたたえたのです。

聖母のためばかりでなく、全人類のために、神は人間となることで、「偉大なこと」をなし給いました。しかし、ナザレトの処女は特別で、格別の高めと比類なき尊厳を受けたのです。神であると同時に人である方の御母となられることによって。

被昇天を祝う本日、教会は、聖母マリアの御口からあの同じ言葉を繰り返し聞きます。「全能にまします御者、われに大事をなし給いたればなり。」

エリザベト訪問は被昇天へとつながっています。託身されたみことばの御母として、永遠の昔から選ばれた聖マリア、神ご自身が御子のペルソナにおいてお宿りになった御母は、聖父と聖子と聖霊の三位一体の神のうちに、無類の方法で、生きはじめておられたのです。

これが、きょう崇敬の念をこめて黙想すべき被昇天の秘義であります。

聖母の御からだとご霊魂は栄光のうちに

神が御子のペルソナにおいて住まいとお定めになった聖母は、無原罪でお宿りになりました。原罪の汚れをまぬかれたのです。それゆえ、原罪とともに人類史に入り込んだ死からも、当然、まぬかれておられます。

聖パウロは、「一人の人間によって死が来たように、一人の人によって死者の復活も来た。すべての人がアダムによって死ぬように、すべての人はキリストによって生き返る。しかしそこに順序があり、まず初穂であるキリスト、次に、来臨の時キリストの者である人々が続く。」(コリント①15・21～23)と言っています。

キリストの御力のおかげで、原罪をまぬかれ、格別異例な方法で贖われた聖母は、同じく格別に異例な仕方で、キリストの復活に与りました。主の復活は、無原罪の御宿りというかたちですでに聖母のなかで罪と死の法則を克服していたのです。無原罪の御宿りの瞬間から、すでに、完全に、罪と死の定めと罰は打ち負かされました。このことは、今日の被昇天の祝日に、はっきりと示されています。

復活したキリストの御母が、御子のあふれんばかりの復活の力に、まっ先に与るのは、当然としか言いようがありません。

聖母マリアは、罪と死の制覇者なる神の御子がすまいと定められた御方ですが、その御母が最初に神のうちに生き、死の腐敗と罪をまぬかれておられるのは、道理にかなったことであります。

聖母は、無原罪の御宿りによって罪を免かれ、被昇天によって、墓の腐敗から守られているのです。

「無原罪の処女マリアが、地上の生活を終えたのち、肉身と霊魂ともに天の栄光にあげられたことを信じます。」(ピオ十二世『ルニフィチェンツィシムス・デウス』一九五〇・十一・一DZ 3903)

聖母はしるし

きょうは特に神の御母をながめましょう。徹底的に神のうちに生きる聖母、つまり聖マリアの栄光に注目しましょう。

聖ヨハネの黙示録に言う、天にあらわれた偉大な「しるし」、それが聖母マリアなのです。(黙示録12・1参照)

現代においてもこのしるしは地上と密接な関係にあります。まず、「竜との」闘いのしるしです。(黙示録12・4)　この闇の中に地上の教会の姿を読み取ることができます。神の国を攻撃するサタンと闘う教会、闇の勢力とたえまなく闘う教会、これがこの世における教会の姿なのです。

■時の流れの中にある労苦や苦難のかなたに、永遠という最終的な次元を見るために、信仰の目を鋭くしておかねばなりません。神の御母のごとく、神と永遠に一致して、「神のうち」に、私たちも生きねばならないのです。

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1983 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

しかし、聖母はまた、決定的な勝利のしるしでもあります。被昇天の秘義の意味するところは聖母の決定的な勝利のしるしです。黙示録の著者はその辺の事情を次のように語っています。「神の救いと力と王国とそのキリストの権威はすでに来た」(黙示録12・10)と。

本日は信仰を荘厳に祝う偉大な祝日です。被昇天の秘義が精神や心の中で自由に働くために、信仰の目を研ぎ澄ましていなければなりません。

被昇天の秘義は私たちにとっても、決定的な勝利のしるしになります。ただし、この勝利を得る前に、闇の力をものともせずに苦しみ、そして闘う必要があります。

時の流れの中にある労苦や苦難のかなたに、永遠という最終的な次元を見るために、信仰の目を鋭くしておかねばなりません。神の御母のごとく、神と永遠に一致して、「神のうち」に、私たちも生きていなければならないのです。

「私たちの中に」必ず神が生きていてくださるようにするには、この地上で生きる間、どのような努力をすればよいのでしょう。

ご託身の秘義により、人となって聖母のご胎内にすまいをお定めになった神は、その前に、まず恩寵によってマリアのうちにおいでになりました。

そして今度は、私どものうちにも、恩寵により、住まうことをお望みです。

「めでたし聖寵満ちみてるマリア……」

本日の荘厳な祝いを機会に、神の恩寵のうちに生きつづけんとする強い望みがよみがえりますように。

「肉身のよみがえり、終わりなき生命を信じたてまつる。」　聖マリアのように、永遠に、神のうちに生きる日を望むなら、この世で生きる間に、神が私たちのうちにご自分のお住まいをお見つけになることができなければなりません。アーメン。(一九八二・八・十五)

婚姻の秘跡

結婚というものは、贖いの神秘から生まれたのち、キリストとその花嫁である教会との愛のうちに生まれ変わった秘跡であって、神の救いの御力を力強く表わしています。例外なくすべての人間の心に巣食う三つの欲や罪をものともせずに、神は永遠のご計画を完成されます。結婚とは神の御力が秘跡のかたちで表われたものですが、この秘跡はまた、キリストが山上の説教で触れておられたように、情欲を制御せよという勧めでもあります。結婚の一性(一致)と不解消性とは、夫婦生活およびその他の相互関係において、情欲を制御した結果であると共に、男性の心の中の女性および女性の心の中の男性、つまり人間の尊さをより一層深く知った結果であります。

贖いの秘跡である婚姻は、神の恩寵として、また、エトスとして「情欲をもつ人間」に与えられています。この点について聖パウロは、独特の表現で、教えを(特にコリント人への第一の手紙第七章)残してくれました。結婚と独身性(天の国のための独身生活)とを比べて、独身を保つ方がより優れている旨のべていますが、同時に、「おのおのは神からそれぞれの賜を受けている。ある人はこれを、他の人はそれを」(コリント①7・7)と加えています。贖いの秘義をもとにして考えれば、婚姻には婚姻に固有な「たまもの」、つまり恩寵のあることがわかります。同じ手紙の中でパウロは、「淫行をさけるために」(7・2)結婚せよ、と勧めています。すぐあとでさらに、夫婦のそれぞれに、「夫は妻に対して義務を果たし、妻も夫に対してそうせよ」(7・3)と忠告し、「結婚する方が情欲に燃えるよりもよいからである」(7・9)と続けています。

聖パウロのこの話をもとにして、結婚は情欲を抑えるための手段であるという考えがでてきました。しかしすでに見たように、結婚には結婚に特有なたまものがあり、このたまものは、贖いの秘義により恩寵として与えられる、というのが聖パウロの教えです。聖パウロは極めて逆説的な言葉を使い、この辺の事情を、結婚はエトスとして夫婦に与えられていると述べるのみです。聖パウロのいわゆる「結婚する方が情欲に燃えるよりもよいからである」という表現中、ardere(アルデーレ)というラテン語動詞は、肉欲から起こる情欲の乱れを指しています。(情欲については、同様に旧約のシラの書23・17にも記述されてあります。)

ところで、結婚とは道徳的な面をも持つもので、これについてはとくに強調しているようです。結婚はエロスとエトスの出会いの場であり、男女の心の中の、また相互関係における、互いの交流の場でもあるのです。

婚姻は、贖いの秘義から生まれた秘跡であって、「歴史のなかに生きる」人間に、恩寵として、またエトスとして与えられている――この真理から、教会の秘跡の一つとしての婚姻の性格がはっきりと決まってきます。教会の秘跡として、婚姻は解消できないという特徴をもっています。教会の秘跡として、婚姻は霊のことばであるから、「体の贖い」の神秘から力を引き出し、夫婦で生涯をともに設計してゆけ、とすすめます。このように夫婦は、「霊に従う」生活、つまり貞潔な生活を営むよう要求されているのです。(ローマ8・4～5とガラツィア5・25参照)　この場合、「体の贖い」には「希望」という意味も含まれます。希望を結婚との関係において見るならば、それは日常生活での希望、地上での生活の希望ということができるでしょう。これらの希望をもとにすれば、自己本位な満足を求める体の情欲を抑えうるだけでなく、その同じ肉体は、男女の秘跡的な契約によって、人格にふさわしく、永続的で、不解消の交流(交わり)の場となるのです。

神の永遠のご計画によって、いわば「一つの肉体」となるべく結ばれた夫婦は、秘跡を通して受けた「たまもの」にふさわしい生き方、つまり「霊に従う」生活をするよう召されてもいます。「霊に従う」生活を送っている夫婦は、そのたまもののおかげで特別に大きな喜びを再発見し、そのよろこびをわかち合うことができます。情欲が精神的な視界を暗くし、よき願望や向上心を心から奪うのに反して、「霊に従う生活」をすれば(これは婚姻の秘跡の恩寵のことですが)、たまものの本当の自由を再び見出し、また、夫婦の肉体が持つ男性、女性それぞれの意味を自覚することができるのです。

「霊に従う」生活は、互いの「一致」ということばによっても表わすことができます。(創世の書4・1参照)　相互の交わりによって「一つの肉体」となった夫婦は、おのおのを出産という恵みに与えつくします。「男は、妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを生み、こう言った、『私は主のおかげで、一人の子をもうけた。』」(4・1)

「霊に従う」生活はまた、よろこびを知るという形で表現することもできます。すなわち、夫婦の親としての尊厳を自覚するということです。そして、それは、命が聖なるものであると知ること、つまり、親として二人が創造の御力にあずかり、命のみなもととなる

説教・講話・書簡等の抄訳

若者たちへ

テレビの画面を通して各国のみなさんと対面できるこの機会に、世界中のあらゆる地域、あらゆる国々の若者に対して呼びかけたいと思います。来年の四月十一日から十五日にかけてローマで予定されている若者のための特別聖年の祭典にどうぞ参加してください。

あなたがた若い方たち以上に、キリスト教のひろがりと深みを理解できる人がいるでしょうか。あなたがたは今、人類のために、より公正な未来を築き上げるべく学んでおられます。あなたがたほどに「その御方」の必要を感じている人がいるでしょうか。「その御方」は、人間のうちにあり、また、人間の存在ということなのです。体の贖いの秘義（ローマ8・19～23参照）と関係のあるこの希望の光を受けて、夫婦の交わりの結果誕生する新しい生命・新しい人間は「霊の初穂」となり（8・23）、「神の子らの光栄の自由にあずかれる」（8・21）はずです。「全被造物が今まで嘆きつつ陣痛の苦しみに会っている」（8・22）のなら、分娩中の母は苦しみのうちにも特別の希望をみることができます。「神の子らの光栄」（8・21）であり、新たに生まれでる赤ん坊がみずからのうちにもつ希望の光を見ることができるのです。

「この世にある」この希望は、聖パウロが教えているように被造物全体に浸透してはいますが、「この世から出たもの」ではありません。それどころか、その希望は、人間の心の中で「この世から出たもの」および「この世にあるもの」と戦わなければなりません。なぜなら、「世にあるもの、すなわち肉の欲、目の欲、生活のおごりなどはすべて御父から出るものではなく世から出る」（ヨハネ①2・16）からです。婚姻は根元的な秘跡であると同時に、体の贖いの秘義を通して、花嫁である教会へのキリストの愛から生まれでた秘跡でもありますから、「御父から出た」秘跡です。婚姻は「世から出たもの」ではなく、「御父から出た」ものなのです。従って、婚姻は、秘跡として、男女、親子、人類全体、つまり人間にとっての希望の基となります。一方で「世と世の欲は過ぎ去り」、他方では「神のみ旨を行なう者は永遠にとどまる」（2・17）のです。この世の人間の起源は秘跡としての婚姻に結びついており、また、婚姻の中には未来も刻み込まれています。しかも、これは単に歴史的な次元においてばかりではなく、終末的な次元においても言えることなのです。

体の復活についてのキリストのお話は、この点に触れたもので、共観福音書に記されてあります。（マテオ22・23～32とマルコ12・18～27とルカ20・34～39）　マテオは「復活の時の人間は、めとりもせず、嫁ぎもせず、天にいる天使と同じようなものになる」と書き、マルコも同様です。そして、ルカでは、「この世の子らはめとったり、嫁いだりするが、来世を受け、死者の中からの復活にふさわしい者とされた人々は、めとりも嫁ぎもしない。彼らにはもう死ぬことがないからである。彼らは天使に似た復活の子らであり、神の子らである」（20・34～36）となっています。

婚姻は目に見えるこの世での人間の起源の秘跡であって、「未来の世界」の終末の状態に属するものではない、とキリストは述べておられます。しかしながら、人間は体の復活によって終末的未来（死後の生活）に参与するよう召されています。この世にあって、みずからの起源を、創造の神秘に関わる根元的な秘跡、つまり婚姻に負っているのです。もっと正確に言えば、未来の復活にあずかるべく呼ばれている人間はだれしも、その復活への呼びかけをこの世にもたらすわけですが、それができるのはこの世における誕生によってであり、人々の両親の婚姻のおかげなのです。かくして、「未来の世界」から結婚を排除したキリストのおことばは、間接的にではありますが、人々とその子孫が将来の復活に与るかいなかという点について、婚姻の秘跡のもつまことに重要な意味をあらわしているのです。

婚姻とは、根元的な秘跡であり、花嫁である教会へのキリストの愛の中で生まれ変わったものですが、終末的希望という次元では「体の贖い」とは関係ありません。（ローマ8・23）恩寵として、夫婦への「たまもの」として、神がお与えになったという点、また、キリストのおことばによるとエトスとしてお与えになった点から婚姻を考えてみると、それは終末的希望という展望のもとにおいて実現完成することがわかります。結婚とは、この点からみると、「体の贖い」にとって決定的に重要なものです。婚姻とは真に御父から来るもの、この世での婚姻の起源は御父のおかげなのです。この世とは「過ぎ去る」もの、また、「この世から出た」肉の欲、目の欲、生活のおごりも過ぎ去るべきものなら、男女を問わず人間が情欲を支配する限り、御父のみ旨を果たしているということは婚姻に保証されることになります。「神のみ旨を行なう者は永遠にとどまる」からです。（2・17）

秘跡としての婚姻が、終末的未来の崩芽をもっているというのは、以上のような意味においてなのです。そして、この点についてはキリストの次のお言葉と関係があります。「復活の時の人間はめとりもせず、とつぎもしない。」（マテオ22・30）　しかし「天使に似た復活の子らであり、神の子らである」（ルカ20・36）者たちも、男女の結婚と出産によって、目に見えるこの世での起源を受けています。人間の「始まり」としての秘跡、歴史に生きる人間のこの世での秘跡としての婚姻は、このようにしてこの世を超えた将来、終末的希望の次元での「体の贖い」の秘義のなかで、かけがえのない役割を果たしているのです。

（一九八二・十二・一）

行動に実に驚くばかりの悪影響を及ぼす多くの悪の根源から人間を救ってくださるのです。

キリストを見つめましょう。キリストは私たちを罪と悪から解放してくださいました。私たち自身が体験するもろさと勝利の確信をキリストのみ前にさしだしましょう。これこそ、若者たちのために企画されたローマ大集会の目的です。それは、祈りと分かち合い、語り合いと喜びに溢れた出会いの場となるでしょう。言いかえれば、真理を求め、生き方を考える集会であり、すこぶる活動的な機会となるでしょう。また、今日の人間の表情、とりわけ明日の人間の表情を生き生きと表わす生活様式をうちたてる人になるための集いです。みなさんの顔にはすでに未来の人間の表情が現われているのです。

■結婚の一性(一致)と不解消性とは、夫婦生活およびその他の相互関係において、情欲を制御した結果であると共に、男性の心の中の女性および女性の心の中の男性、つまり人間の尊さをよりいっそう深く知った結果であります。

不変の教え

神と人間をよく知るための
教父たちの研究

教父たちの教えの中には、すべての刷新のもとになる不変の真理があります。彼らの著書、人柄、生きた時代を知ることの重要性、必要性を考えてみましょう。力強い教えが得られます。そのいくつかを次に挙げてみました。

聖書を愛すること

聖書を愛する。教父たちは、聖書をみずからの考えの支え、ひいては、考え方そのものとして研究し、註釈を加え、人々に説いてきました。そして聖書の深み、豊かさ、不謬性を浮き彫りにしました。神のみ言葉をみごとに説き明かした人、聖ヨハネ・クリゾストムスはこう話しています。「聖書の中には神のみことばがある。他に教師を求めなくてもよい」と。ここで聖アウグスチヌスが聖書を理解できるよう恩寵を求めた祈りを思い出さないわけにはゆきません。「聖書において、みずからを偽ることも、他を欺くこともないように、聖書がわが清き喜びにならんことを。」(『告白』11,2・3〔PL32,810〕)　聖書(解釈)の原理はすでに聖ユスティヌスが詳しく説明していますが、それによれば、聖書には矛盾するところは皆無です。聖書に誤りがあると非難するぐらいなら、みずからの無知を進んで認めるといっています。ヒッポの司教は同じことを有名な言葉で明確に述べています。「この書の著者は事実に即して語っていないなどと言うことは決してできない。写本が正しくないか、訳に誤りがあるか、それともあなたが理解できないか、のいずれかであるから。」(『ファウスト論駁』11,5〔PL42,249〕)

聖伝に忠実であること

第二に、教父は聖伝に忠実であれと教えます。といえばすぐに聖イレネウスの名が頭に浮かんで当然なのですが、彼は大勢の中のひとりにすぎません。オリゲネス、テルトゥリアヌス、聖アタナシオ、大聖バシリオも、聖伝には忠実でなければならぬという原理を説いた人たちです。この点についても、聖アウグスチヌスは底の深い、忘れ得ぬ言葉を残しています。「カトリック教会の権威によって納得したのでなければ、私は福音を信じないだろう。キリストが設立され、使徒が発展させた教会は、絶え間なく続く使徒継承を経て、私たちの時代に届いたのです。」(『ファウスト反駁』28,2〔PL42,486〕)

救い主キリスト

第三は、人類の救い主キリストについての教えです。教父たちはキリストの秘義を解き明かし、キリストを異端から守る努力をしたが、人間とは何かについてはつまびらかにできなかった。このように考える人もいるかもしれません。しかし、深く知ってみると、そうではなかったことがわかります。教父たちは愛あふれる心でキリストの秘義を見つめました。そしてキリストの秘義を考察するうちに、人間の秘義を理解することができたのです。実にそれは、人間の救いに関するキリスト教の教え(超自然的人間学)であり、いくどとなく、キリストの秘義に関する教えを弁護するために役立ったものなのです。例えば、聖アタナシオがアリアヌス論駁中、力強く断言しています。万一、キリストが神でないとすれば、神は人間を神の似姿にかたどって創られることはなかったであろうと。またナジアンスの聖グレゴリオも対アポリナリ論駁で述べています。万一、みことばが理性を備えた真の人性をおとりにならなかったとすれば、神は人間をお救いにはならなかったであろう。キリストがお取りにならなかったものは、救われなかったからである、と。聖アウグスチヌスは『神国論』に書いています。キリストが全き神であらせられると同時に全き人間でなかったのならば、キリストは神と人間の間の仲介者にはなり得なかったであろう。さらに、つづけて、「人間であるだけでなく、同時に、神であらせられる仲介者を求めなければならぬ」とも言っています。(『神国論』9,15,1)

第二バチカン公会議は次のように宣言しています。「実に、託身されたみことばの秘義に照らさなければ、人間の秘義は明らかにならない。(…) 新しいアダムであるキリストは御父とその愛の秘義を示すことによって、人間を人間自身に明かしてくださるのです。」(『現代世界憲章』22)　以上のことは回勅『人類の贖い主』でも思いだしていただきましたが、それは教父の教えの繰り返しにすぎません。言うまでもなく、特に聖アウグスチヌスがこれを対ペラジウス論駁の中で説明し立証したのです。聖パウロの書簡を読むうちに、人類の救い主キリストを見出し、溺れる者が救いの板にしがみつくようにキリストを抱きしめた、とアウグスチヌス自身書きしるしています。人間と人間性についての諸問題に対する答えをキリストのうちにみつけたのはそのときだったのです。のちになってその辺の事情を、キリスト信者の希望の本と称されている『神国論』で述べています。

以上のようなわけで、教父の教えを学ぶということは、より深くキリストを知り、より深く人間を知ることにつながるのです。科学的にも立証され、考証ずみのこの知識は、キリストが人類の救い主であることをあらゆる人々に宣べ伝えるという教会の使命にとって絶大なる助けとなることでしょう。

全キリスト

キリストとその人性についての教父たちの論考は、聖アウグスチヌスの言う全キリスト(Christus totus)、つまり教会の教えから何ら離れるところありません。教父たちは教会の内で、教会のために、一生を送りました。教父たちは、教会が一であること、教会の母性、そして教会の歴史的現実性に対して鋭い「感覚」を備えていたのです。この点については第二バチカン公会議でも主張されています。ヒッポの司教の言葉を繰り返し、バチカン公会議が述べていますが、教父たちは教会を、アベルの時代から世の終わりまで、「神のもとでの安らぎと、この世での迫害の闇」を行く地上の巡礼であると考えたのです。そして教会の一致(一性)を強調しました。神は真理の教えを一つの教座に与えられたからです。いかなる困難がおこっても、信者は教会の内では安全である、論争が起こっても、教会の中で解決しなければならない。謙遜に、カトリック的平和のうちに、キリストの愛をもって。

「いかなる人でも、父として神を、母として教会を抱いていれば安心です」と聖アウグスチヌスは言います。そして聖チプリアヌスと同じように、警告を発しています。「教会を母として抱くことができなければ、神を父として抱くことはできない」と。

(一九八三・五・八)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部六十円送料六十円　■一年予約七百二十円送料七百二十円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393